

安吾賞選考委員



委員長
野田一夫
(財)日本総合研究所会長
多摩大学名誉学長



新井満
作家



池田弘
(学)新潟総合学院理事長



猪口孝
中央大学大学院教授



河田珪子
支え合いの地域づくりアドバイザー
「うちの実家」代表



齋藤正行
安吾の会世話人代表



坂口綱男
写真家
(坂口安吾長男)



古海正子
IBMアジア・パシフィック・コーポレーション
HRプログラム担当マネジャー

お問い合わせ先

〒951-8550 新潟市総務局国際文化部文化振興課
TEL. 025-226-2153 FAX. 025-225-7111
e-mail bunshin@city.niigata.lg.jp
URL http://www.city.niigata.niigata.jp

安吾賞推薦人(敬称略 50音順)

青木 邦雄 (財)JR東日本鉄道文化財団専務理事
青島 健太 スポーツライター
嵐山 光三郎 作家
安斎 隆 (株)セブン銀行代表取締役社長
安藤 忠雄 建築家/東京大学名誉教授
稲盛 和夫 京セラ(株)名誉会長/稲盛財団理事長
上原 明 新潟商工会議所会頭
植村 鞆音 ハーパー研究所監査役
内田 力 (株)コロナ代表取締役社長
梅原 猛 哲学者
荻野 アンナ 作家/慶應義塾大学教授
角川 歴彦 (株)角川書店代表取締役会長
川淵 三郎 (財)日本サッカー協会キャプテン
北川 正恭 早稲田大学大学院教授
小林 幸子 歌手
佐藤 忠男 日本映画学校校長
佐藤 信秋 国土交通省事務次官
白井 克彦 早稲田大学総長
菅原 文太 俳優
関川 夏央 作家/評論家
高澤 正樹 新潟放送相談役/日本文芸家協会会員
武田 鉄矢 歌手/俳優
立松 和平 小説家
田中 里沙 宣伝会議編集長
檀 太郎 CMプロデューサー/エッセイスト
中山 輝也 新潟経済同友会代表幹事
野沢 慎吾 セコム上信越(株)代表取締役
服部 幸應 (学)服部学園理事長/服部栄養専門学校校長
医学博士/新潟市食と花の総合アドバイザー
小説家
火坂 雅志 (株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長 兼 CEO
福武 總一郎 作家/法政大学教授
藤沢 周 (株)ティー・ヴィー・キュー九州放送代表取締役社長
牧 作樹 編集工学研究所所長
松岡 正剛 (株)ミヅマアートギャラリー代表
三浦 未雄 アルビレックスチアリーダーズ・ディレクター
三田 智子 俳優
三田村邦彦 作家
村松 友視 日本銀行監事
村山 俊晴 岩波書店代表取締役社長
山口 昭男 デザイナー/プロデューサー
山本 寛斎

安吾賞賛同者(敬称略 50音順)

渥美 千尋 在中国日本大使館特命全権公使
泉田 裕彦 新潟県知事
今村 昌平 映画監督
内山 秀夫 慶應義塾大学名誉教授
内海 桂子 (財)漫才協会会長
遠藤 実 (財)遠藤実歌謡音楽振興財団理事長
ジェームス三木 脚本家
篠田 正浩 映画監督/早稲田大学特命教授
瀬戸内 寂聴 作家
檀 ふみ 女優
手塚 真 ヴィジュアルリスト
早野 透 朝日新聞コラムニスト
福原 義春 (株)資生堂名誉会長
松永 二三男 日本テレビ放送網(株)企画開発担当部長
宮田 亮平 東京芸術大学学長
株式会社旺文社

肩書きは平成18年3月31日現在のものです。

出でよ、
現代の
安吾

Ango's words

私は偉大な破壊を愛していた。
墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。
余は偉大なる落伍者となっていていつの日か歴史の中によみがえるであろう。
僕の生き方にただ一つでも人並みの信条があったとすれば、
それは『後悔すべからず』ということであった。
ほんとうに可愛い子供は悪い子供の中にいる。



新潟市



2006年10月20日 坂口安吾生誕百年

合併記念事業アイディアのなかで、「安吾賞の創設」が最優秀作5点のひとつに選ばれた。

新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。挑戦者を応援する都市風土を育み全国に発信するため、安吾の精神を具現しさまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」を創設する。

安吾の衝撃

1945年8月15日、ポツダム宣言受諾を告げる玉音放送が流れた。「神州不滅」の熱狂に踊らされ、「一億玉碎」を唱えてきた日本は、敗戦の日から一変した。

焼け野原の日本にコーンパイプをくわえたマッカーサーが降り立ち、日本国民はマッカーサーと進駐軍を解放者として迎えた。

軍国教育の先頭に立っていた教師は「米国民主義」の崇拜者になり、特攻崩れは生きるために闇屋となった。街には進駐軍兵士と連れ添う戦争未亡人の姿があった。

廃墟と化した街並みにたたずむ人の心も、これまでの価値観が崩壊した虚脱感と明日への懐疑心により焼き尽くされていた。

天皇の「人間宣言」で明けた1946年も混乱は続いた。その年の4月、茫然と焼け跡に立ち尽くす日本人の心に一編のエッセイが鋭く、奥深い、一撃を与えた。坂口安吾の「墮落論」だった。

「人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な道はない」

安吾の登場は「地軸を揺るがすような響き」を立てるほどの衝撃だった。

「戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きてから墮ちるだけだ—墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し救わなければならない」

甘い自己弁護や皮相的な解説、世のまやかしを許さず、「人間の実在を認めよ」との本質を鋭くえぐった安吾のメッセージは、混乱の世相を切り裂く一条の光となった。

出でよ、現代の安吾

戦後60年。モノと情報が溢れ、自由と気ままさを謳歌する日本に、「開国」「敗戦」に続く「第3の敗戦」がささやかれている。「豊かさの中の空虚さ」に蝕まれ、「明日は今日より貧しくなる」との黄昏感に染まっていた日本の今こそ、現代の坂口安吾が求められているのではない。

敗戦で虚脱した日本に安吾が登場し、心底からの衝撃を日本人に与えたように、現代・日本に世相を切り裂くメッセージを求めたい。

メッセージや論説に限るものではない。名誉や実利を捨てた献身的行動や社会システムを変える新しい実践も当然範疇に入るし、世俗の常識を変える挑戦精神や自己実現を図る超然的な努力も現代の安吾にふさわしい。

生きる甲斐を見失って途方に暮れている日本に、いま「大いなる喝を入れる」ことが重要と思う。

安吾精神を顕彰

坂口安吾が生まれ、青春の思索を育んだ地である新潟市から、現代の安吾に光を当てたい。日本人に大いなる勇氣と元氣を与え、明日への指針を指し示すことで現代の世相に喝を入れた人や団体に「安吾賞」を贈りたい。

世俗の権威にとらわれずに本質を提示し、反骨と飽くなき挑戦者魂こそ安吾精神にかなっており、「安吾賞」にふさわしい。

現代の安吾に光を当てたい。

安吾年譜

明治39年(1906)10月20日、父仁一郎、母アサの五男として新潟市西大畑町に生まれる。(本名・炳五)西堀幼稚園、新潟尋常高等小学校(現新潟小学校)へ進む。大正8年県立新潟中学校(現県立新潟高等学校)入学。この頃から学校にもあまり登校せず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで空と海と風と波と光とを終日眺め思索した。荒漠たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう 大正11年、中学3年生の9月、落第が決定的となり東京の豊山中学3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。大正14年豊山中学を卒業。世田谷下北沢の分教場(現代沢小学校)の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。その体験は『風と光と二十の私と』になる。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

求道者、安吾 大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、ペリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

文壇デビュー 昭和6年1月、処女作『木枯の酒倉から』を発表。5月『ふるさとに寄する讃歌』、6月『風博士』を発表、牧野伸一が激賞。7月『黒谷村』を発表、島崎藤村などが賞賛し、新進作家として文壇に認められる。昭和7年の夏、新進女流作家の矢田津世子を知り烈しいプラトニック・ラブに陥り、安吾は懊悩し酒場のマダムなどと同棲するデカダンスな生活を重ね、4年後ようやく彼女と訣別を決意。昭和13年、新たな決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』(S15)、『木々の精、谷の精』(S15)などの新境地をひらく。

小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美 昭和17年、国粹主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を鷄呑みにすることの欺瞞を指摘した。

墮ち切ることで真実の救いを発見せよ 昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本質を洞察し、4月『墮落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『墮落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の禪を洗う女』を発表。

戦う安吾 昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負ケラレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』(S27)発表。

急逝 昭和30年(1955)2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48歳。

